

第1回「日本ラテンアメリカ学会優秀論文賞」受賞論文講評

和田杏子「植民地期メキシコにおけるインディオ村落共同体の分離と教会堂の運営：18世紀末イスミキルパン郡マペテを巡る訴訟を中心に」『ラテンアメリカ研究年報』39: 107-134, 2019年

本論文は18世紀末メキシコ中央部の先住民村落を扱う歴史学研究である。まず筆者は、先行研究を二世代に分類する。植民地期の先住民共同体における先スペイン期との断絶・連続に関する問題および植民地期をとおして顕著な現象である主村からの属村の分離・独立という現象に着目したのが第一世代である。第二世代では、属村分離の外的要因（人口増加、王室の徴税方針など）に着目し、分裂を属村の生存戦略の結果であると評価する。本論文は、それらの成果の延長上に課題を設定する。すなわち、村落の分裂を主村と属村の両者を包摂する空間で展開する社会・経済的変化の文脈に位置づけ、村落外部の先住民のかかわりと、分裂がもたらした地域社会への影響にも注目する。さらに筆者は、事例とした属村マペテが、16世紀半ばに鉱山開発のためにスペイン人が労働者を集めて設立した先スペイン期に起源をもたない集落であることに着目し、「先スペイン期からの伝統的村落」に関心をよせる従来の研究動向に一石を投じる。

中核となる史料はAGN（メキシコ国立公文書館）所蔵の大司教座聖堂裁判所訴訟記録（1797）である。これに、AGNと人類学歴史学研究所の歴史資料センター所蔵の四つの一次文献からの情報を織り交ぜて、主村（のバルマ・ゴルダ地区）が分離後のマペテの教会堂から撤去された聖像の復帰を求めておこした裁判の行方を追ひ、属村マペテ分離の背後にあった地域社会の状況を再構築する。同時に、マペテが所在するイスミキルパン郡の歴史的背景と18世紀末の社会経済状況（鉱山業の復活、先住民の生業・労働形態・経済力、人口推移、民族的混交状況）を説明し、奇跡をなす聖像を有するマペテ教会堂が広く巡礼者を集めていた事実を指摘することにより、聖像の所属をめぐる訴訟事件をより広範な地域誌の中に位置づけることに成功している。

筆者は、「（先スペイン期との直接のつながりを欠く）マペテの教会堂は、他郡のインディオが教会堂建設の献金のマヨルドーモになるなど、郡の境界を超えたインディオの社会的結合関係によって維持されていた。広域的な社会的結合関係に依拠する教会堂の管理方法は18世紀には慣行として定着していたが、マペテの分離はこの慣行を揺るがした」との解釈に至る。そしてこの慣行をめぐる利害関係が、主村（のバルマ・ゴルダ地区）がマペテ教会堂への関与をつづけるために聖像の奪還を大司教座聖堂裁判所に訴えて成功したことの背景にあったと結論づける。

本論文は、本事例をとりまく歴史的・社会経済的状況を叙述し、さらに他の史料から得られる事実で主たる史料の分析を巧みに補完しつつ、聖像をめぐる争いから主村と属村の紛争の顛末を詳細にあぶりだし、根拠ある質の高い論述を行って読者を納得させている。今後、当該聖像にまつわる伝承や儀礼・慣習などに関わる資史料が付加されれば、さらに充実した内容になるとの期待を抱かせる労作である。以上の所見に基づき、審査員一同は、歴史学の方法論においても期待される研究の厚みにおいても、本論文が第一回受賞論文に値するとの意見において一致を見た。